

90

「西洋医学」と「東洋医術」——雑誌『日本医学』  
掲載の「将来の医学」座談会（1937年）から

誌上発表

勝井 恵子

東京大学大学院教育学研究科／北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部

「現代の科学的医学と東洋本有の医術とを集大成し学術道三者帰一を要諦とする本邦独自の医学の建設を期す」との宣言のもと、1935年に発足した日本医学研究会は、その機関誌『日本医学』を1938年1月に創刊している。研究会および雑誌ともに、当時の科学論の代表的論客であった東京帝国大学医学部生理学教授・橋田邦彦が中心となって誕生したものであることは、拙論（2010）で指摘したところであるが、雑誌『日本医学』の第1巻2号および3号には、「将来の医学」と題された座談会の様子が掲載されている。

この座談会は、1937年11月29日に東京帝国大学医学部生理学教室で開かれ、この教室の長であり、日本医学研究会の主宰でもある橋田自身の存在は確認できないが、出席者として内山孝一、馬場和光、安西安周、柳谷素霊、本川弘一、松岡脩吉、木村長久、和田正系などといった、橋田の高弟や東洋医学関連の重鎮たちが名を連ねている。「西洋医学の最近の傾向、現代医学の缺陷、漢方医学の特質、日本医学の根本的理念等に就て新進医家の御意見を拝聴すべく」開かれたというこの座談会では、「日本全体の転換期といふやうな際に、その中に医学丈が舊態依然として居るという事は有り得ない事でありまして、医学も亦非常な転換期にあると言はなければならぬ」といった内山孝一のことばが冒頭にみられ、西洋医学（科学的医学）と東洋医術をめぐる議論が繰り広げられている。

参加者全員の共通の問題意識は、医学におけるそれぞれの専門性が分裂状態にあるということであり、その問題解消への共通認識は、細分化してしまった専門性たちを総合し、「人」の全体を診るには東洋医学（東洋医術）的な視点が最適であるということである。ただ、議論のなかで、鍼灸師である田中恭平の「お灸の方から視ましても、現代の所謂科学的の医学といふものは是非尊重し用いて行かなければならぬ」という主張は特筆すべきだろう。それにくわえ内山孝一が、師である橋田邦彦の医学思想の核とも言える「生の全機」という概念を用いながら、「現在の科学的医学を心身一如といふ立場に於て発展させて行かなければならぬ」と、「科学的医学を研究して居る人達は東洋古来にありまする医術といふものをもつと科学的に研究する必要がある」と、傷寒論の現代的研究の重要性についても言及しつつ、弁論を繰り広げている。そして馬場和光は、「今の医学では病名に捉はれて居るからいけない、病名に捉はれないで行つて治る方法」と東洋医術を位置づけ、「漢方の方を進歩させて之を現代医学的に研究して行く」と主張している。そして、座談会は、将来の医学とは科学的医学と東洋医術との結合による日本医学の建設にあり、「日本医学即国際医学、日本医学即世界医学、といふ所を目指して、この研究会は発展していくべき」との方針を示すのである。

1937年という、後に始まる戦争への足音がだんだんと近づいてくる気配が漂うこの時期に、西洋医学（科学的医学）と東洋医術を統合し、「日本医学」という、日本という国に馴染む医学を「将来の医学」に、そしてそれが世界全体にとって有益なものとして存在できるようにと議論を深めていたことは、昭和初期の東洋医学史を再考するうえで一つの試金石となりうるだろう。くわえて、橋田邦彦研究においては、橋田の「医」の思想が、父親で浅田宗伯門下の漢方医であった藤田謙造の影響を受けていることのひとつの証左ともなるだろう。

## 【参考文献】（五十音順）

勝井恵子、「橋田邦彦研究——ある「葬られた思想家」の生涯と思想」『日本医史学雑誌』、2010年、第56巻4号  
日本医学研究会、「将来の医学」（上）（下）、『日本医学』、1938年、第1巻2-3号